12276

セネガル国
ファティック・総合農村開発グループ派遣
巡回指導報告書

平成１２年１０月

国　際　協　力　事　業　団

青年海外協力隊事務局

JICA LIBRARY
1209181 [5]

青海二
JR
00-19

1209181 [5]

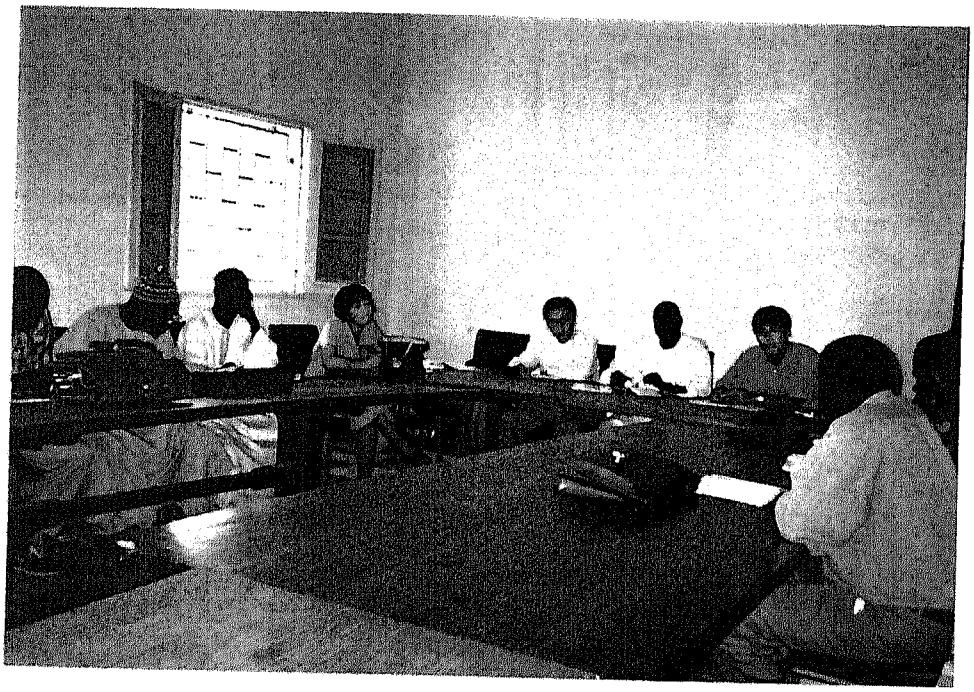
セネガル全土地図

MAURITANIA
Podor
Richard-Toll
Saint-Louis
Matam
Linguère
Thiès
DAKAR
Diourbel
Nayé
MALI
Kaolack
FATIK
Tambacounda
THE GAMBIA
Bignona
Kolda
Ziguinchor
Kédougou
GUINEA-BISSAU
North Atlantic Ocean
GUINEA
0 50 100 km
0 50 100 mi

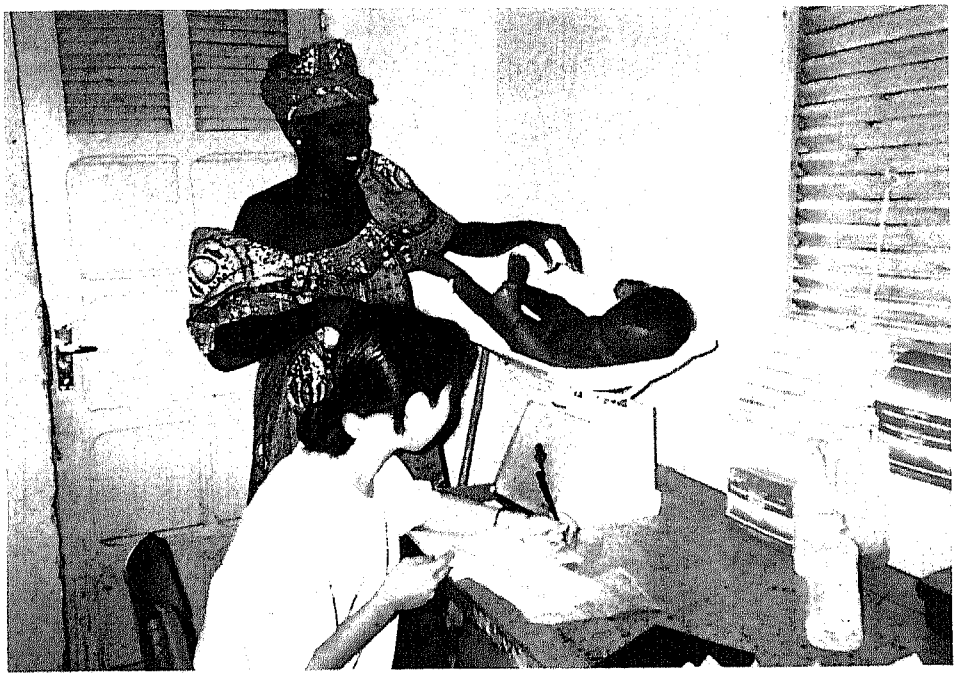
移植水田にて（島田隊員・稲作）

ファティックグループ隊員との懇談会の様子

牡蠣の養殖（七尾隊員・養殖）



ファティック州農村開発課郡長との会議の様子



赤ちゃん体重測定（松本隊員・村落開発普及員）

「村落会」隊員との懇談会の様子

第１章　調査概要

１－１　調査団派遣の経緯と目的

セネガル国ファティック県においては、１９８７年から内務省農村開発課を受入機関として、青年海外協力隊は種々の職種の隊員が連携して活動を行ってきた。現在、活動拠点を３ヵ所において、農業・医療分野の隊員と村落開発普及員との有機的な連携により活動を行っている。月１回の隊員間における会議、及び３ヶ月に１回の農村開発課配属先上司を含めた会議において、隊員活動報告、配属先との意見交換を行い、着実に成果を上げている。配属先からは、本グループ派遣に対して高い評価を得ている。

しかしながら、１９８７年の開始から１３年を経た現在は、ファティック県の隊員の間でグループ結成当初の問題意識が共有できず、グループ活動が希薄になっている。今後の効果的な村落開発に対する隊員派遣を行うため、どのような職種と活動を中心とするのか、また、隊員活動の現状を確認しつつ、どういった方向で活動を続行するかを模索するため、１９９９年１１月にシニア隊員が派遣された。

シニア隊員が派遣されて１０ヶ月が経過し、これまでの活動の成果、並びに問題点を確認し、今後農村開発を目的とした隊員派遣を行う上での問題点の洗い出しと対処方法を提言すること、また、セネガル事務所において今後の当プロジェクトの実施計画案について協議するため、調査団が派遣されることとなった。

同調査団はファティックグループ派遣隊員に限らず、ファティック州内及び近隣地域で活動する村落開発に関与する隊員の活動の視察も同時に行い、活動を行う上でのアドバイスを与えることも目的とした。

１－２　調査団の構成

技術指導	亘　純吉	駒沢女子大学　人文学部　教授　亘純吉
調整・計画	宮原　千絵	青年海外協力隊事務局海外第二課セネガル国担当

１－３　調査方法

（１）調査方針

（ア）　隊員の活動現況を調査し、問題点を明らかにした上で、今後の活動の方向を検討し、助言、指導を行う。隊員と共に「サヘルにおける村落開発」を考え指針を示す。

(イ)　隊員活動支援を行う近藤シニア隊員から見た、隊員活動における現況、問題点をふまえ、隊員活動支援について助言・指導を行う。

(ウ)　今後の当グループ活動における活動方針及び派遣計画について、関係機関並びに事務所と協議する。

(エ)　ファティック外で村落開発活動に従事する隊員の活動を視察し、助言・指導を行う。

(オ)　以上の調査内容を総合し、セネガル及びファティックでの村落開発におけるグランドデザインの作成について提言する。

（2）調査項目

(ア)　JICA事務所におけるファティックグループ活動並びにファティック以外の地域の隊員活動対する評価、今後の取り組み。

(イ)　ファティック及び他地域隊員配属先における隊員の活動に対する取り組みと隊員の受入体制。

(ウ)　隊員（ファティック・ファティック外）・シニア隊員（ファティック）のこれまでの活動に対する自己評価、問題点とその解決方法、具体的改善策。

(エ)　隊員のグループ活動にかかる意識と問題点。

（3）調査方法

ファティック総合農村開発グループ派遣の現隊員のほとんどが派遣後間もないため、既に実績のある隊員の活動地を訪ね、現況調査を行った。サイトの訪問はグループリーダーであるシニア隊員と隊員、本部からの調査団員、セネガル事務所調整員で構成され、隊員の配属先では隊員のカウンターパートと隊員活動について協議した。活動内容の実施状況の確認方法については、調査団の活動現場視察及び視察中における隊員並びにシニア隊員、また、ファティック州農村開発局各郡長との会議をもって行われた。視察はファティック州内の４郡、及び隊員が活動する周辺の村で行われた。

1－4　調査日程

9月　6日（水）　移動
技術指導：東京　→　パリ　　パリ泊

9月　7日（木）　移動
技術指導：パリ　→　ダカール　　ダカール泊

9月　8日（金）　移動・表敬
12：00　技術指導：ダカール発
14：30　技術指導：ファティック着　ファティック州農村開発局表敬
16：00　技術指導：ファティック隊員の活動について打ち合わせ
ファティック泊
15：30　計画・調整：ニアメ発
22：00　計画・調整：ダカール着　　ダカール泊

9月　9日（土）　移動・サイト調査
08：30　計画・調整：ダカール出発
08：30　技術指導：
Mbamane村　小学校果樹園とトイレ・水道施設視察
（織田隊員・果樹、岡崎隊員・看護婦）
Boot Mbalane村　小学校トイレ・水道施設視察
（岡崎隊員・看護婦）
Bicole村　直播きと移植水田視察
（島田隊員・稲作）

10：30　計画・調整：ファティック着
15：00　ファティック隊員と「サヘルにおける村落開発について」討議
17：00　ファティック出発
19：00　トゥバクータ着　　トゥバクータ泊

9月10日（日）　サイト調査
08：00　牡蠣養殖、マングローブ林視察（七尾隊員・養殖）
10：00　Ndounbouji村　保健所視察（秦野隊員・保健婦）
11：00　Sangoko村　女性グループ活動視察（山本隊員・村落）
13：00　トゥバクータ出発
14：30　フンジュン着
午後　資料整理・団内打ち合わせ　　フンジュン泊

9月11日（月）　サイト調査
07：00　フンジュン出発
09：00　タタギンヌ着　タタギンヌ郡農村局訪問、郡診療所視察
（川村隊員・看護婦）
10：00　ファティックへ移動

10：30　ファティック州農村開発所長及び隊員配属先郡長との会議
15：00　ファティック出発
16：30　ワディオール郡着　隊員配属先訪問
（深井隊員・村落）
17：00　ワディオール出発
18：30　ティエス着　ティエス泊

9月12日（火）　サイト調査
08：30　ティワバンヌへ出発、五島（11/3・看護婦）及び鈴木（11/3・野菜）隊員の活動村（ヤジン村）視察
10：00　松本隊員（11/2・村落）隊員の活動先（病院）視察
10：30　ンゲコ村へ移動
13：00　佐藤隊員（11/3・青少年活動）活動現場視察
15：00　ンゲコ村出発、新隊員（12/2で赴任・村落開発普及員）活動地ピキンを視察し、ダカールへ
16：30　新隊員（12/2で赴任・日本語教師）赴任先視察、カウンターパートと協議
19：00　ダカール着
ダカール泊

9月13日（水）　移動
09：00　大隈隊員（11/2・SE）活動現場視察
10：30　村落開発関係隊員との懇談会（サヘルにおける農村開発について）
14：30　山崎隊員（11/3・音楽）活動現場視察
22：55　ダカール発　ダカール→パリ（AF719）
機内泊

9月14日（木）　移動
19：00　パリ発　パリ→成田（JL406）
機内泊

9月15日（金）　帰国
13：40　成田着

１－５　主要面談者リスト

地域開発地方分権化省農村開発課ファティック州局
　局長：Mr. NGOM
　担当官：Mr. Inoussa MOUSTAPHA

JICAセネガル事務所
　黒川　所長
　米倉　調整員
　長谷川　調整員

ファティック・グループ隊員
　近藤　直　（シニア・グループリーダー）
　島田　隊員（１１／１　稲作、農村開発課ファティック州事務所）
　岡崎　隊員（１０／２　看護婦　農村開発課ジャハオ郡事務所）
　織田　隊員（１０／２　果樹　農村開発課ファティック州事務所）
　原田　隊員（１２／１　看護婦　農村開発課フィムラ郡事務所）
　肥田　隊員（１２／１　果樹　農村開発課タタギンヌ郡事務所）
　遠藤　隊員（１２／１　野菜　農村開発課ニャハル郡事務所）
　久保田　隊員（１２／１　野菜　農村開発課タタギンヌ郡事務所）
　川村　隊員（１１／３　看護婦　農村開発課タタギンヌ郡事務所）
　門脇　隊員（１２／１　看護婦　農村開発課ジャハオ郡事務所）

ファティックグループ外巡回指導対象隊員
　秦野　隊員（１２／１　保健婦　農村開発課ファティック州トゥバクータ郡事務所）
　山本　隊員（１１／３　村落　農村開発課ファティック州トゥバクータ郡事務所）
　七尾　隊員（１１／１　養殖　漁業海運省ファティック州ミシラ漁業センター）
　深井　隊員（１２／１　村落　農村開発課ファティック州ワディオール郡事務所）
　五島　隊員（１１／３　看護婦　農村開発課ファティック州ティバワンヌ郡事務所）
　鈴木　隊員（１１／３　野菜　農村開発課ファティック州ティバワンヌ郡事務所）
　松本　隊員（１１／２　村落開発普及員　農村開発課ファティック州ンダンド郡事務所）
　佐藤　隊員（１１／３　青少年活動　青年省セネガル・ガールスカウト連盟本部）
　大隈　隊員（１１／２　システムエンジニア　国民教育・職業訓練省）
　山崎　隊員（１１／３　音楽　文化・通信省国立芸術学校）

第２章　グループ派遣の概要と総括

２－１　グループ派遣の概要

項　　目	内　　容
グループ名	ファティック総合農村開発グループ派遣
活動地	ファティック州ファティック県
活動開始年	1987年
グループの構成	シニア隊員：グループリーダー（村落開発普及員　1名） 協力隊員：野菜2名、稲作1名、果樹1名、村落開発普及員1名、看護婦1名
相手国実施機関	地域開発地方分権化省農村開発課
グループ活動の開発目標	ファティック県各地域（ファティック、フィムラ、タタギンヌ、ガンビエ等に、野菜・果樹・看護婦または保健婦及び村落開発普及員等の職種の隊員を組み合わせて農業技術の普及を行い、農作物の収穫を増やすことにより農民の収入を増加し、栄養改善・医療の普及・衛生状況の改善をはかり、結果的に農村を総合的に開発する。
グループ活動の個別目標	1　生活環境の改善（トイレの設置、衛生・識字教育等）の実施。 2　モデル菜園（稲作・野菜・果樹）の運営 3　住民への農業技術移転
活動の現状	現在、活動拠点を３ヵ所において、農業・医療分野の隊員と村落開発普及員との有機的な連携により活動を行っている。月１回の隊員間における会議、及び３ヶ月に１回の農村開発課配属先上司を含めた会議において、隊員活動報告、配属先との意見交換を行い、着実に成果を上げている。配属先からは、本グループ派遣に対して高い評価を得ている。 しかしながら、１９８７年の開始から１３年を経た現在は、ファティック州の隊員の間で、問題意識が希薄になっている。今後の効果的な村落開発に対する隊員派遣を行うため、どのような職種と活動を中心とするのか、また、、隊員活動の現状を確認しつつ、どういった方向で活動を続行するかを模索するため、１９９９年１１月にシニア隊員が派遣された。

２－２　巡回指導調査の総括と提言

２－２－１　ファティックグループ隊員の活動についての確認事項

ファティックグループ活動に関しては、従来のグループ活動のようなある特定の目的に向かって同職種の隊員が共同して取り組む活動と言うより、異なる職種の隊員がそれぞれの技能や専門性を活かしながらグループ内の他の隊員と連携しつつ、ファティック州全体の農村生活の改善を目指していると言った方が現状に近い。現在はシニア隊員が中心となり、隊員配属先と今後の協力活動について話し合いがもたれる機会が増加し、隊員が現場及び活動に円滑に取り組める環境が整っている。また、配属先においても協力隊の目的・隊員の履歴、「技術移転」に対する考え方への理解が深まりつつある。そのため、「総合農村開発」に向けてグループの繋がりを強調するグループ活動に時間をかけ過ぎるよりも、自分の活動村での効果を高めるためのサポート的機能をグループ内に充実させる方が現状に則している。したがって、今後の活動については、現在のグループ形態（各々の活動の自然な繋がりを尊重し、シニアが必要に応じて技術的バックアップを行う）を継続しつつ、より異業種間の緩やかな連携を進めるべきである。

シニア隊員は、赴任当初はグループとして具体的な成果をあげるような活動ができるようグループ活動を立て直すことを考えたが、実際に派遣されている隊員とのインタビュー調査、これまでの隊員の報告書、また、配属先の要望の聞取り調査を行い、グループの今後の活動方針を、ファティック県に配属される隊員が最大限その活動を円滑に行うためのバックアップ的機能とすることに決定した。また、配属先との連絡・調整をスムーズに行うこと、ファティックでの村落生活向上に繋がる要請を現場の意見を最大限に取り入れて作り上げることを課題としている。

セネガル事務所においても、現在の「緩やかな連携」を目的としたグループ活動を進めることを提言しており、また、シニア隊員がファティック地域で活動する隊員に対し最大限の技術的、また、生活における支援を与えていることで、隊員がよりスムーズに配属先に溶け込み、早い時点から有効な協力活動が始めることができるという事実についても、高く評価している。今後は、シニア隊員がファティックの村落開発という目的により則した要請を開拓していくことを期待している。

隊員はほとんどが着任後数週間しか経っていないため、グループ活動の実際及び問題点や改善点については具体的な意見は少なかった。前任からの活動をどのように引継いでいくかについての悩み等はあったが、それについては技術指導が懇談会においてアドバイス

を行った。

2－2－2 グループ外の隊員活動についての確認事項

グループ外の隊員に関しても、その受入先のほとんどが地域開発地方分権化省農村開発課である。隊員が主に抱えている問題は、自分の持つ技術と現場へ移転すべき技術の整合性について、及び活動村での活動内容と展開の方法についてである。特に、村落開発や巡回指導等を経験したことのない職種（看護婦・野菜等）の隊員は、どういった切り口で村落開発と自分の持つ技術とを融合すべきかで悩みが多い。

2－2－3 配属先の受け入れ状況

ファティックグループ隊員の配属先である地域開発地方分権化省農村開発課は、隊員の受け入れに非常に積極的であり、また、隊員の活動に大きな期待を寄せている。また、現地の支援要員としてシニア隊員が派遣されたことも高く評価されている。ファティック滞在の最終日にはファティック州農村開発局局長も招いて、ファティック州各郡の農村開発課郡長（その多くは隊員の配属先である）を集めて意見交換会を開催した。各配属先郡長は概ね高い評価を隊員に与えたが、多くの配属先は、隊員の活動期間が2年間と短いこと、また隊員活動を円滑にすすめるための金銭的支援が限られていること、研修等のインセンティブをカウンターパートに与えることを述べた。それに対し、調査団からは、協力隊は国民参加のプログラムであり相互理解を進めるためになるべくたくさんの隊員に参加してもらうため2年以上の派遣期間とはできないこと、機材供与と協力隊はスキームが違うこと、カウンターパートの研修については受入も可能であることを述べた。また、その場でJICA事業と協力隊事業について説明会を行うことが調整員からも提案された。

2－2－4 提言

上記確認事項を元に、以下を提言する。

(ア) ファティックグループの活動は、今後も現在の緩やかな連携の中で、村落開発に従事する隊員が円滑に活動を行えるよう、サポート的な役割を担う。

(イ) シニア隊員は村落開発に従事する隊員、特に「村落開発」という視点からの業務や知識が限られている隊員のためにワークショップ等を開催し、隊員の理想とする活動との整合性を明確にしていく。

(ウ) シニア隊員を中心として、貸与されている車輌等を有効に使用し、フィールドコーデ

ィネーションを徹底する。

(エ)村落隊員でなくとも村落開発活動に従事する隊員は、派遣前に村落開発についての研修を受講する。

(オ)セネガル事務所と配属先（農村開発課）の間で協力隊事業と他の JICA 事業の違い及び連携方法等についてのワークショップを開催し、配属先の事業に対する理解を深めてもらう。

第３章巡回指導調査内容

３－１　ファティックグループ

ファティックグループ隊員のほとんどが着任後間もないことから、実際の活動現場の視察は既に１年以上活動の続いている３カ所のみで行い、グループ隊員全員に対し、今後ファティック及びサヘル地域でどのように農村開発活動に協力すべきかの視点から、グループミーティングを通して以下のとおりアドバイスを行った。

（１）前任者が行ってきた活動をトレースすること。そこから自分のスタイルに合う形で活動をすすめること。

（２）これまで住民が行ってきた手法には現地ならではの知恵がつまっているため、無理に日本のスタイルを強要せず、農民と話し合いつつ受け入れられる下地があれば新しい技術を移転すれば良い。

（３）自分の職種だけの協力に完結せず、必要であれば村落隊員からアドバイスを受けたり、他の職種の隊員と合同で活動を行ったりすることにより、より高い成果を目指すのも一つの手である（アグロフォレストリー園の造設など）。

（４）ファティック隊員の配属先（農村開発課）は隊員活動について比較的理解があるので、１人で活動を進めず、カウンターパートとよく話し合い、相手方に求められている点について協力をする。

以上のようなアドバイスは村落開発隊員であれば知識として持っていることであるが、ファティック・グループ隊員の中には「村落開発」という専門分野とは異なる分野の隊員（例えば看護婦・保健婦等）も多数いるため、「村落開発」という枠組みの中での「保健・医療」という点も強調しつつアドバイスを行った。

３－２　協力隊員の配置、活動状況など

織田　隊員（１０／２　果樹　農村開発課ファティック州事務所）

小学校果樹園視察（Mbamane村）

学校果樹園の立ち上げを主たる活動としている。樹種の選定、作業労働などプロジェクトの過程を詳細に記録することの重要性を指摘した。特に果樹園の管理・運営と学校（あるいは集落）との関係を記録することの必要性を示唆した。また、完成予定の模型あるいは図を用い、児童に将来の夢を描かせ、計画性を養うことを助言した。

岡崎　隊員（１０／２　看護婦　農村開発課ジャハオ郡事務所）

トイレ・水道施設（Mbamane村）及び小学校トイレ・水道施設視察（Boot Mbalane村）

衛生教育の一環として、栃木県足利市の援助を受け、村の小学校にトイレおよび水道の敷設を行った。今後の保守管理の見通しと、その運営法について隊員と共に検討した。なお、トイレ、水道施設にプロジェクトの記章を記し、青年海外協力隊および足利市市民の存在を明確にしている点も高く評価した。

島田　隊員（１１／１　稲作、農村開発課ファティック州事務所）

直播き・移植水田視察（Bicole村）

天水が溜まった窪地を中心に水稲を直播・移植の形態で栽培を試みている。自然条件が厳しく、一部の圃場では水の供給が絶たれ十分な生育が見られない。稲作が食糧供給に占める割合は低いが、住民の稲作に対する耕作意欲は高いようである。適正品種（複数）の導入、耕地整備の方法、直播栽培について隊員と共に検討した。なお、稲作を積極的に試みるグループがあり、このグループを中心とした野菜生産の試みを支援する際の栽培および社会的留意点について助言を行った。

七尾　隊員（１１／１　養殖　漁業海運省ファティック州ミシラ漁業センター）

マングローブ林視察

牡蠣養殖をマングローブ林保全という自然保護的な活動と並列させつつ展開している。とくに牡蠣稚貝の付着、その後の発育条件を水産学（養殖学）の視点から科学的に解明する取組みに対して高い評価を与えた。今後養殖法の確立にむけた取り組み、及びエコツーリズムの開発に期待したい。

秦野　隊員（１２／１　保健婦　農村開発課ファティック州トゥバクータ郡事務所）

保健所視察（Ndounbouji村）

配属直後であり、活動の背景となる地域の情報収集にあたって入る段階で、具体的な活動には到っていなかった。国道に面し、村の中央に位置する休止状態の施薬施設を利用した公衆衛生や栄養改善プログラムの可能性について、具体的な方法や事例を含めて助言した。また、同地域で活動する七尾、山本両隊員の協力をあおぎつつ活動する可能性を検討した。

山本　隊員（１１／３　村落　農村開発課ファティック州トゥバクータ郡事務所）

女性グループ活動視察（Sangoko村）

前任者から引き継いだ村落の活動では、村落内で積極的に生活改善運動に参加する家族とそうでない家族との間の人間関係の調整について助言を与えた。また、新たな拠点となる集落については、小規模貸付を含む生活改善運動への取り組みとその可能性について隊員と共に検討した。既成の枠組みにとらわれない活動を期待する。

川村　隊員（１１／３　看護婦　農村開発課タタギンヌ郡事務所）

タタギンヌ郡農村局訪問、郡診療所視察

村落における保健衛生活動の基本的な取り組みについて、事例をまじえて助言した。赴任後まもなく、自身の活動の原点に迷いが生じているように感じられたため、得意の分野を生かしたマンパワー的な協力をとおして公衆衛生の啓発を行うことについて検討した。

深井　隊員（１２／１　村落　農村開発課ファティック州ワディオール郡事務所）

隊員配属先訪問

村落活動一代目隊員の第一歩として集落の概況を把握する作業を展開している。既刊の資料と現在の資料の差に戸惑いを感じていたため、政府資料のみならず他国援助機関の資料を用いること、また、自ら資料収集をする大切さと方法、活動と最終的な評価のあり方について助言した。

五島　隊員（１１／３　看護婦　農村開発課ファティック州ティバワンヌ郡事務所）

鈴木　隊員（１１／３　野菜　農村開発課ファティック州ティバワンヌ郡事務所）

隊員の活動村視察（ヤジン村）

両名が活動するヤジン村とその周辺地域の視察が中心であった。小規模の村落での活動のあり方および水をめぐる公衆衛生と野菜栽培について、無理をせず地についた活動を展

開するよう助言した。

松本　隊員（１１／２　村落開発普及員　農村開発課ファティック州ンダンド郡事務所）

村落での活動では、移動手段が問題となっていること、そのために思うような活動が出来ていないことが報告された。助言は、カウンターパートと協力のあり方を中心に行った。また、診療所での診察記録の整理については、診療所側から高い評価を受けており、その活動に敬意を表す。

佐藤　隊員（１１／３　青少年活動　青年省セネガル・ガールスカウト連盟本部）

活動現場視察（ンゲコ村）

ンゲコ村で開催していたキャンプ現場を視察した。短時間の視察であり活動の説明を受けたにとどまった。青少年活動の意義を自身の言葉で説明できる存在になってくれることを要望した。語学習熟度が早く今後の活躍を期待する。

大隈　隊員（１１／２　システムエンジニア　国民教育・職業訓練省）

配属先における活動現場視察

世界的に進展する情報化に対し途上国の情報インフラ未整備は青年海外協力隊レベルでは十分に対応することのできない問題である。隊員はこの問題と職場における管理維持のコストにも深く係わり、現在は単に機材の供与や隊員の協力活動だけでは解決がつかない状況にある。後任の派遣については今後の援助資金の流れを確認しつつ検討する必要がある。

山崎隊員（１１／３　音楽　国立芸術学校）

配属先における活動現場視察

国立芸術センターでピアノ指導の活動を視察した。時間的制限があり、教科教育の方針や方法についての説明を受けるに及ばなかった。明らかに楽器の数は限られているが、日本から供与された楽器の保管状態は良くなく、今後は保管・管理といった面での協力活動も考えられるのではないか。

３－３　村落会隊員との懇談会

セネガルでは村落開発普及員をはじめ、村落で活動する隊員が「村落会」という一種勉強会のような集まりを作っている。その村落会との懇談会を現地事務所にて開催した。この懇談会での主題は、具体的な形をみることのできない村落開発活動に対して、隊員自身のアイデンティティが揺れること、またそのような状況の中で、どのように活動終了時に自身の活動を評価するかについての手法であった。

３－３－１　村落活動と隊員としてのアイデンティティ

隊員ハンドブックに記載されている目的と意義を明確にして、自身の活動を目的、方法、現状、将来（夢）を一貫性を持って説明できることの大切さを話した。また、配属先の同僚、他国のボランティア、現地のNGO、あるいは村落開発の専門家などとの議論の中で、協力隊の理念と目的、そして隊員自身がどのように活動を考えているのかを報告書と言う形で表現するにあたって、その方法についての助言を与えた。

隊員にとってこの種の問題は、派遣前研修で考えてきたことではあるが、現地に派遣されると別世界のことのように思えるようで、協力隊の原点と個々人の将来をどのように結び付けることができるかを議論した。また、この議論をとおして、グループ活動における活動目的とそれに向かう隊員各自の活動のあり方を考えた。そして村落開発活動では、女性の自立、住民参加などの問題が意識されるが、精神的自立、自主性などの背景にある経済的な問題を避けることができないことを説明した。つまり、グループ活動とは住民の生活向上、及び、生活における経済基盤確立に関係する種々の職種の隊員の力を結集し、寄与することでもあることを説明した。

３－３－２　活動終了時の評価方法に関して

村落開発活動は各隊員の目標にしたがって展開していく性格の強い活動である。その評価は隊員活動が終了した時点で目に見える結果としてとして示すのは難しい。すなわち、活動はtry and errorの連続であり、どのような過程を踏んできたかが重要であり、何か目に見える結果がすぐさま効果としてあらわれない。つまり、住民に対するさまざまな角度からのアプローチは、すべてに成果があがるものではない。隊員はこの点を理解しているものの、活動のまとめや最終報告書を書く段階でどのようにまとめるべきかが分からないとの意見が出された。とくに、グループ派遣の目的との整合性については、グループの活動理念が不鮮明のため報告書としてまとめづらいという問題が提起された。

この問題についてグループ派遣のあり方については、その理念を平易な言葉で説明することを試みるよう助言した。さらに村落開発に係わる活動では、問題に対する「取り組み方」とその「過程」を丁寧に記録することが大切さであること、そのためには数字的な資料ばかりでなく写真、ビデオなどの映像資料、インタビュー、語りなどの音声資料も視野に入れての記録を提言した。

3－4　隊員活動の視察のまとめ

今回の巡回指導は、平成 12 年度 1 次隊の隊員にとって派遣後 2 ヶ月目であり、現地の状況把握に全力をつくし今後の活動の青写真を描いている時期に実施された。活動に取り組む隊員個々人の差も徐々に見えてくる時期でもある。

隊員の中には農村における生活改善運動の経験が若干ある者もいるが、ほとんどの隊員にとって村落での生活、すなわち農村社会の実情やそこにおける人間関係について、漠然と理解しているものの、実際経験のないものが多数である。また、日本とは異なる自然環境にも戸惑いをきたしている隊員もいる。この種の問題の解決には、社会や文化に関する基本的な理解や自然と生業に関する考え方など、自然や文化に対する基本となる知識―応用するに足る知識の深さと問題解決にあたる発想―を確認する機会を作り上げることが必要と思われる。つまり、理論と体験が補完し合う研修を現地において常に行うことがが望ましい。

ファティック県で展開している村落開発に係わる活動は、個々の隊員の対応では一定の評価があがっているものの、シニア隊員を中心に展開されているグループ活動では、その目的と方法、その評価に関する核心をついた報告がなされていない。しかし、グループ活動をとおして醸造されてきた施設、車両、資材の運用に関するノウハウは今後の青年海外協力隊の活動のあり方に一石を投ずると思われる。

セネガルに限らず、ある地域を対象にする村落における活動では、人の移動や資材の運搬が最大の問題として浮上する。配属先組織において、隊員が企画した活動を円滑に支援してくれる車両はない、と言っても過言ではない。この問題をファティックのグループ活動は、現地事務局の指導のもと、運用規則を作り上げ、シニア隊員の監督下、車両の効果的な運用を行っている。この種の車両運営は、青年海外協力隊としての活動の中で複数の異職種隊員から構成する村落開発活動において青年海外協力隊が検討すべき事例であると考える。

また、すでに具体的な活動を展開している隊員は、異なる自然、社会、文化環境のもと、各自の持つ力を発揮していた。一般的な傾向として、各自が活動の過程で蓄積した経験を、知識として後任隊員に説明する努力があと一歩必要である。ファティック隊員連絡所では、個々人の活動をファイルとして蓄積する作業を行っているが、情報が後任者や新規に活動を立ち上げる者にとって有効に形で利用されることを望む。例えば、染色、野菜栽培、栄養指導等の活動テーマに沿った問題項目の資料収集を行って欲しい。

第４章　課題と提言

４－１　セネガル国における協力隊活動について

1)　隊員個々人は、彼らがおかれた状況のなかで積極的に行動し具体的な成果をあげている。共通する問題点として、隊員側からは、受け入れ側組織の経済的な弱さを指摘する声がある。セネガル国の行政組織は、同じサヘル地域の他国と比較すると整備されているが、予算実行を伴っていない。この点は、セネガル国のみならずいわゆる開発途上国に共通する問題である。協力隊の活動がこの点を織り込み済みとして隊員に活動を求めるのであるならば、隊員の移動（緊急時を含む）・運搬手段としての車両の運用などを組み込んだ対応を組織（協力隊事務局）として模索する必要がある。

2)　隊員所属先との関係で、多くの隊員が負担に感じることは、JICA プロジェクトと協力隊活動の根本的な違いがあるにもかかわらず、配属先は協力隊＝JICA（いわゆるオール JICA）の構造でしか隊員の活動を見ておらず、物質的、経済的援助を要請される機会が多いこと、さらに EU をはじめとする諸外国の援助では、ローカル・スタッフへの経済的支援があり、それも期待されていることである。青年海外協力隊の基本方針は、ここに一線を画していることを各隊員が配属先やカウンターパートに行う説明のみにとどまらず、現地事務所も「青年海外協力隊とは何か」との原点に帰り積極的に関係機関へ啓発を行うべきである。派遣前の研修や現地訓練においても、現地の言語でこの課題をどのように説明するか取り上げる必要があると思われる。

3)　任地において、隊員自身の存在、活動を目に見える形（看板、プレートなど）でアピールすること、すなわち協力隊の宣伝が更に必要と思われる。

4)　派遣前訓練においては、異文化における活動の問題点及びその具体的解決策を示す等の訓練を更に充実させる必要がある。一部隊員は協力隊活動について「2 年間とにかく無事に過ごして帰国すれば良い」といった認識を持っている者がいることも事実であり、この点についての説明方法を考慮する必要がある。

4－2　ファティックグループ派遣について

4－2－1　活動の運営について

一般的に捉えると、青年海外協力隊がどのようにサヘル地域における開発に関わっていくのかという指針が不明瞭である。すなわち、セネガル国の行政組織とどのように係わり、また、どのような活動を展開するのかを、コーディネートあるは統括する部署の所在が明確でない。事務局の国担当は、2～3年で配置転換になり、継続的な活動を支援しきれていない。したがって、ある程度の広さをもつ地域（例えばサヘル地域、メコン川流域、太平洋諸島域など）の青年海外協力隊活動を持続的に統括する部署あるいは担当を明確にすることが必要である。JICA レベルで展開するプロジェクトは、いわゆる国内支援委員会を組織しその任にあたっているが、青年海外協力隊レベルにおいても、グループやチームを派遣する場合には必ず同様な組織あるいはその任にあたる担当者が必要であると考える。

4－2－2　グループ活動における実態の検証と評価について

セネガル国は農業を国の基幹産業として位置づけているため、その基盤となる農村を対象とした村落開発に係わる派遣要請が根強い。この種の活動は長期にわたる取り組みを必要とし、かつ農業技術的な対応だけでは不十分であり、社会的な対応を含めた活動が期待されている。したがって、まとまりのある地域に農業分野の隊員を中心とした緩やかなグループ派遣的な性格をもつ村落農業振興プロジェクトを動態的に運営にする必要がある。ファティックのグループ活動はまさにその先鞭的な性格をもつが、活動の点検と評価が十分に機能していいないために、グループの活動の理念を隊員個人が自身の活動との関連／脈絡を明確にできない状況にある。

ファティックにおけるグループ活動で、これまでの成果を踏まえ活動を行っている隊員は多い。しかし、グループとしての活動の成否は、すでに指摘したようにグループとして活動の理念を持ちえることと、変化してゆく自然や社会環境に対応した活動が出来るか、にある。今後ファティック州における農村開発の基本的な枠組みとして効果が期待されている活動は、以下のような総合農村開発の分野があるだろう。

1）　地域の植生回復を念頭に入れた農村開発

農業隊員の派遣は、今後とも必要であるが専門に特化することなく幅広い農業改良普及員的な活動が望まれる。

これまでの農業隊員の多くが、個々の作物の栽培を主眼おいて活動を展開しきた。このような活動では、農業と生活、すなわち自然とそこに生存するに必要な「技術」としての農業を考える視点が十分でなかったことは否めない。具体的な事例をあげて説明すると、耕地の造成、管理、作付けの体系を植生との関係で再考あるいはサヘル地域の伝統的な農業経営とその価値観を考察し、自然・農業・人間の関係を生態学的な視点から捕らえ直し、農業経営を考えようとする姿勢である。

例えば、「古老を交えて集落周辺の植生を再現する。ジオラマを作成し視角に訴え、議論を深める。」ことによって原形となる農業環境を浮かび上がらせる作業も必要ではないか。また「家畜が耕地に侵入することを防ぐ生垣を現地ではよく見かけるが、そこに様々な果樹や樹木を植えることによって植生の回復に寄与する可能性はないのか、など自然・技術・社会の視点から「サヘルにおける農業とはなにか」「あるいは乾燥地における水と人びと」をグループの議論として、つねに問い続ける姿勢である。農村総合開発で農業を核とした活動は、多様な農業生態系をどのように人間が係りつつ作るかを考えることである。

2）農村の生活改善を目標とした活動

ファティックのグループ活動で生活改善を担当してきたのは、現地からの要請によって看護婦、保健婦、村落開発普及員である。今後、要請側の変化がないかぎり、この枠組みが固定する可能性があるが、家政や栄養の隊員に拡大させることも考慮しておきたい。いずれの職種であってもファティックの生活改善活動に係るには、専門知識に加えて社会的文化的な視点がら議論に参加できる能力が必要となろう。

例えば、サヘルの農業環境が厳しくなったのは人間の活動が拡大して引き起こされたためとするなら、村落開発はこの問題と向き合った活動を展開することが肝要となる。村落開発普及員の場合、改良かまどの普及活動を行なうことは同時に薪炭材の再生産、さらには、かまどを介しての栄養や健康、女性の労働や自立なども活動の視野に入れておく必要がある。村落総合開発とは、生業である農業とそれを支える価値観や世界観の枠組みを意識して行なう必要がある。保健衛生あるいは公衆衛生の知識を背景とする看護婦や保健婦の隊員の場合も同様で、単に医療に関する知識を提供するだけではなく、社会と医療（農村社会における病気の概念、伝統的な呪医と近代的な治療など）のあり方を実施できる能力が求められる。

4－3　村落開発に携わる隊員の研修について

村落活動で活動する看護婦・保健婦・野菜を職種とする隊員のネックとなっているのが自身の技術や考えを具体的に説明できる人間関係が十分に構築できていないない事実にある。このような隊員は、「私の活動が、現地で役に立ち、人々が希望に満ちた未来に向かって歩みだした」と表現されるイメージを抱き、自身の活動が劇的な効果を生みだすような錯覚に陥ることがしばしばある。この背景には、現地の人々に等しく接し、住民全体で技術的な問題を解決にあたり住民とともに問題を解決した、とする発想がある。これは、理想的な意味あいを持つもので、隊員の活動期間が２年であることを考慮すると、自身が納得できる成果をみるのは極めて難しいと思われる。とくに農業技術に関しては、季節性を考慮すると、よくて１回の作期しか体験できないこともある。このような条件の中で隊員に期待される活動は、技術に関わる活動もさることながら、住民に新しい取り組みに関する情報を発信し続けることである。換言するなら「あきらめることない係わり」なのである。すなわち『隊員ハンドブック』に記載されている隊員像を平易な言葉で体現できることが求められているのである。

現地での活動を支える自信は、隊員の技術に関する能力ではなく、任地における社会的・文化的な理解度である。「農業とは何か」という活動の支えとなるものは、我が国における農業の実像である。村落における活動は、つねに比較の対象として日本の農村がおかれている。村落型の隊員は、農業改良普及所と農家の関係を体得させ、そこにある問題の所在を認識させる努力をする必要があるようにも思える。

人間の営みとしての農業は、社会や文化と切り離して論ずることができないことは明白である。これまでの事前研修をさらに飛躍させ、より実りある成果を期待するなら、自然・技術・社会を取り込んだ包括的な研修を視野に入れることが必要となる。

我が国は 1950 年代を境にかって経験したことない早さでムラもマチも変化した。とりわけ農村社会は、村落社会の存続問題にとどまらず、集落の消滅にまでいたっている。このような社会的背景のなかで、農村の社会の仕組み、人間関係、価値観、世界観を感覚的に理解し育った若者は激減しているのである。

我が国の産業構造の変化とともに、大学における農業教育も変化してきた。農学部のカリキュラムは、時代の要請もあり遺伝子や生化学を中心に科目が編成され、自然と人間の営みを重視する栽培学的な科目や農場での実習が形骸化していることも確かである。このようなカリキュラムで教育を受けた隊員の中には、農学部出身といっても作物の栽培をま

ったく経験しない者をはじめ、農村社会の抱える問題や食糧政策などを議論する機会を持たなかった者もいるのである。派遣前訓練では、農業技術と技能の修得のみに特化することなく、文化・社会・自然を内包し農業生態的な視点を重視することが必要である。

従って、派遣前訓練にあたっては、以下の事項を留意することが重要である。

1) 隊員が任地で遭遇するであろう人間関係のありかた、異文化への理解とその対応に関するロールプレイングの実施。

2) 農業は、自然に対する人間の働きかけであり、その一歩は、自然と作物の関係を注意く観察することからはじまる。この作業をとおして自然の大きさ（恐ろしさ）を再認識するプレゼンテーションを行う事を提言する。以下にプレゼンテーション実施時に留意する項目を記す。

- 農業技術は自然と向かい合う場面がとくに強調されるが、その運営は極めて社会的であること。
- その土地に定着する技術とは、同時に自然および社会に適応しなければならないこと。
- 伝統的な農業技術は、その土地の自然（気候、植生、土壌、水）に深く係わり成立してきた。一朝一夕に変えられるものではないこと。
- 新しい技術は、あくまでも個人の対応として扱われ、社会の構成員がそろって同じスタートラインにつき、同時に新技術を受容することはないこと。農民は、新しい農業技術が有効で、その安定性が明らかになるまで、新しい技術の導入には慎重であること。導入した技術の有効性が確認できたり、社会的状況に変化（税制の改革、土地制度の変化など）が契機とならない限り、農民は現状の技術に留まる傾向が強いこと。
- 村落開発普及の活動の第１歩は、環境や生活の実態を性格に把握することである。ビレッジプロファイル、土地利用地図、栽培カレンダーなど具体的な調査手法の提示を検討する必要がある。

3) 村落開発の活動は、活動で必要とする地理、社会、生活記録に係わる資料の収集分析をとおして、住民のニーズを浮上させることが大切である。個人の能力を越えた活動は、近隣で活動している異職種の協力をあおぎ、他隊員と広がりをもった地域活動の可能性を追求して欲しい。グループの活動を包括的にみることができるシニア隊員の存在は、この種のプロジェクトではなくてはならない存在であり、ファティックのプロジェクトはではこの機能が生かされていた。車両をふくめた機器・設備の運営は、今後のグループ派遣のモデルを提供している。

参考資料

1. ファティック州農村開発局会議議事録

2. ファティックグループ活動ガイド

ファティック農村開発局、東京ミッション会議議事録

日時：平成12年9月11日
参加者：亘顧問、宮原事務局員、米倉調整員、近藤シニア隊員、伊藤隊員、農村開発局ファティック州事務所所長ンゴンム、同県事務所所長ンジャイ、サーネ、ジャータ、同郡事務所所長ジョップ、ニャン、ンジャイ、サール、カマラ、ンバイ、ディウフ

会議議題
1、隊員活動に対する評価（隊員受け入れ経験がある所長のみ）
2、今後JOCVとどの様に活動していこうと考えているか
3、どのような隊員が現場で求められているか

アーリーサール（ジャハオ郡所長）
1、現在活動している看護婦隊員と野菜隊員が配属されてから2年近くが経つ。
看護婦隊員は主にポストドサンテ（地域診療所）でワクチン接種、体重測定を手伝っている。また、ワクチン接種活動が滞っているポストドサンテに働きかけ、ワクチン接種活動再開に協力している。
小学校のトイレ建設、水道設置、それにともなう衛生教育の実施、また余ったトイレ建築予算で学用品の援助も行った。
地域医療、衛生に対する彼女の活動を高く評価している。
野菜隊員も良くやっている。タグジャム村での井戸掘りは困難もあったが現在では村民の農業活動に役立てられている。

2、2年の任期は短い。やっと現地に慣れ、現地の状況を把握し、良い活動が始まった頃に帰国になってしまう。
配属先との協力関係をもっと深めるべきである。隊員は村人と直接コンタクトを取りたがるが、その結果村人にだまされてしまう事が少なくない。村、村人に対する知識、認識不足から来る失敗を避けるためにも配属先との協力関係を密にすべきである。

3、村人の様々な問題、状況に対応できる村落開発隊員が望ましい。自分の専門の事にしか対応出来ない、またしようとしない隊員は、総合的な開発が求められる現状において難しい。

ンゴール　ディウフ（フィムラ郡所長）
1、私が活動を共にした隊員は、先日任期を短縮して帰国してしまった佐野隊員（11-1　村落開発）だけである。彼女は配属先生活改良普及員と協力して、女性グループを対象に編

物教室を開いていた。今後も継続されていく事を望む。学校でのトイレ設置、衛生教育なども計画していたが、家族の事情で帰国してしまったのは残念だ。配属先とよく協力し頑張っていた。

新隊員の看護婦はまだ来たばかり。地域医療の情報を集めるために、しばらく診療所に通うようだ。

住居の整備がまだ整っていない。アメリカ平和部隊のように、隊員専用の家を建てればどうか。

2、関係技官、関係組織との連携をとることが大切だ。

3、隊員要請時、また後任要請時にもっと配属先と話し合い意見を聞いて欲しい。

マガイジョップ（ニョジョール郡所長）

1、隊員受け入れは現在の伊藤隊員（11 - 3、稲作）で2人目であるが、とてもよく協力して仕事を進めることが出来ており大変満足している。

ニョジョール島では ISRA 農業試験場との共同で、稲作試験栽培を行っている。無人島のジムサン島では伝統農法を復活させた農法で稲作に取り組んでいる。島間移動には船外機を利用せざるをえなく、その軽油代がいつも問題となっている。

植林活動、野菜栽培活動にも取り組んでいる。

2、今後も今まで通り活動を続けていく。新たな計画としては、種、肥料などの農業資材を販売する店の出店を考えている。また、ジムサン島での稲作面積拡大のためのトラクター導入も考えていきたい。

2年の任期は短い。稲作は時期が限られるので、赴任時期を考慮して欲しい。

モモドゥンバイ（ワジュール郡所長）

1、隊員を受け入れるのは今回の深井隊員（12 - 1、村落）が初めてである。まだ着任して間もないが、配属先との関係もよく、地域にも溶け込んでいる。

2、４０の女性グループからなる女性グループ連盟がある。連盟の資金をよく運営し、活動も順調。深井隊員には、連盟加入グループと活動していってもらう予定。活動グループの選択は、各グループとの接触の中で深井隊員自身が選んでいけばよい。

移動手段に問題あり。現在は郡知事の車両で巡回しているが、いつでも自由に利用出来るわけではない。バイクの利用は本人の気がすすまないようだ。

マリックンジャイ（ジロール郡所長）

１、現在ジロール郡配属の隊員はいないが、フンジュン県配属の赤星隊員が同郡内で活動している。雨季中、雨水を集める装置を作り塩害が出ている井戸に雨水を大量に落とす事によって、乾季野菜栽培用灌漑水を確保する実験を行っている。活動に関する報告を怠らず、またまめに顔を出してくれるので非常に好印象である。

２、隊員とともに巡回し協力を積極的に図りたいが、移動手段の問題は常に付きまとう問題である。
　２年間の任期は短い。村人が望み、本人が望んでいるのであれば延長を認めて欲しい。

３、ジロール郡は、農業に適した水の確保が可能な地域もある。海もある。現在申請している稲作隊員はもちろん、漁業、果樹分野の隊員も必要とされている。

ニャン（タタギンヌ郡所長代理）
１、看護婦隊員は現在配属されている川村隊員、その前任者の岡前隊員も配属先との協力関係も良く高く評価している。先日帰国した果樹隊員、野菜隊員は配属先との連携も希薄で何をしているのかわからないという状態だった。今回新しく来た２人の農業隊員には、我々としっかりした協力関係を築いて活動していって欲しい。

２、７月から日本人を含め、農村開発局の月定例会議を実施しているので、お互いの活動に対する理解協力もすすんでいる。今後も現在の良い状態を保ちながら活動を展開していく。
３、後任要請時に配属先としっかりとした話し合いの場を持って欲しい。

アマドゥサーネ（フンジュン県所長）
１、現在４人の隊員がフンジュン県事務所に配属されているが、皆活発に活動している。
　松尾隊員（10－3、看護婦）は置き薬、ビタミンＡ摂取推進のためのカボチャ菓子普及、体重測定、衛生教育などに取り組んでいる。三宅隊員（11－２、青少年活動）は手作り工作、村でのバレーボール、また先日は青年スポーツ省の企画「バカンス　シトワイアン」にも参加し青少年達とともに植林活動に励んでいた。赤星隊員（10－3、野菜）はジロール所長の説明に加え、学校植林などにも取り組んでいる。星野隊員（11－２、村落）は前任者からの引継ぎである女性センターの運営、また水産加工にも取り組んでいる。

マジャマンジャイ（ファティック県所長）
　ファティック県事務所には隊員は配属されていないが、今までなされた報告の中から協力隊についてのべる。
　協力隊の活動は、地域に根ざし小規模な投資で村落生活向上に貢献しようとする場合が

多い。これは長所と言える。　しかし現実を見るに、その活動が充分な効果をあげているとは言い難い。その原因としては、

①現地組織との連携が悪い

②現地語の習得が不十分なため、村人とのコミュニケーションが充分でない

③地域文化、習慣に関する理解が浅い

④現地への同化が不十分である

が挙げられる。

今後の対策としては、配属先との協力関係を深めることが重要であるが、あわせて配属先全体をバックアップしていく事も重要。巡回の手段となる車両や燃料に、農村開発局側の予算が充分でない事は現実であり事実である。

シェアンゴンム（ファティック州所長）

今日の会議の中でいくつかの問題が挙がったが、ひとつ農村開発局側が認識しなくてはならない事は、隊員は農村開発局側の要請によって配属されていると言う事である。つまり開発局側のイニシアティブのもと、隊員を活用していかなくてはならないと言う事である。どのような目的で、どのような職種の隊員を呼び、どのような計画の下活動していくつもりなのか農村開発局がしっかりと認識しなくてはならないのである。

現在、農村開発局と隊員との協力理解を深めるために月例会議を推進している。隊員が配属先との協力関係を希薄にしている事が問題になっている事務所は、是非とも月例会議を実践するべきだ。タタギンヌ事務所における会議の実施が、よく機能していることは注目に値する。

巡回に伴う移動手段の問題は、すぐに解決できる事ではない。ファティック州に配属になっている隊員は、隊員用車両を使用する事が出来るのでその利用が１つ解決策として考えられる。また、ファティック隊員調整員の近藤にも専用の車両が貸与されているので彼とともに巡回する事も有効な手段となるであろう。その他、JICA の古いバイクや車両も申請によっては農村開発局に与えられる事があるのでその可能性も考慮すべきである。

JICA 側も、本当に隊員活動が村落開発に対しより効果をあげることを望んでいるのであれば、今までのように隊員を個別に派遣するだけというやり方では限界があることを認識して欲しい。村落共同体（村民）を組織し、村民が村民自身で村民の管理のもと、村民のニーズにあったことを進めていけるようなプロジェクトを行うべきだ。農村開発局がその組織作りを実施し、また技術的にもサポートしていくというやり方。その中で隊員も配属先の一員として、各人の専門性を生かしながらより有効に機能することが出来る。JOCV の予算ではそのようなプロジェクトを行う事ができないのはわかっている。そのようなプロジェクトを行う事は JOCV の役割でない事もわかっている。しかし、JICA が本当に村落開発に貢献したいと思っているのであれば、また JOCV が村落開発のためにより有効に機能することを望んでいるのであれば、そのようなやり方をしていかないと今後大きな進展

は期待できない。

宮原職員

本日はお忙しいところ会議に参加していただき感謝している。また、色々な意見を頂き今後事業をすすめるにあたって検討していきたいと考える。2点だけ確認したい。1点目は、隊員の任期は2年が短すぎるとの意見が出されたが、協力隊事業は国民参加のプログラムでもあり、より沢山の日本の若者に国際協力に参加してもらう機会を与えるためにも、2年の任期を伸ばすことは難しい。また、機材供与等に関しては、協力隊援助のスキームでは現実的ではない。JICA の他のスキームの中で検討できると考える。

亘技術顧問

日頃は協力隊事業についてご理解とご支援を頂き感謝している。協力隊の事業については、隊員の派遣機関や物質的援助に関し制限が設けられている。今後はセネガル事務所とも協力し、JICA の他のスキームで対処できることがないか、検討していただきたい。

米倉調整員

JICA の役割、JICA に出来る事、JOCV の役割、JOCV に出来る事に対する理解を深めてもらうために、各農村開発局の所長を集めて今度セミナーを開きたいと思う。

文責　　近藤　直

ファティックグループの歴史と今後のグループの方向について、出来るだけ簡単に説明させていただきます。

<黎明期>

グループになったのは１９９０年、カザマンス紛争を逃れてきた隊員のうち４名がファティックを再赴任地として選んだ事に端を発します。それまでファティック県内の各郡に野菜隊員が個々に配属されているだけだったのが、これにより複数業種構成になったということです。また同時期、単独機材供与によってトラクター、トラックなどの機材が導入され、その運営管理の便宜ということも１つの理由として挙げられるでしょう。

それはつまり、ファティックの村落民が抱えている問題が分析され、その問題を解決する事を目標とした具体的な計画が建てられ、その計画を実行するための一番効率的な形態としてグループが結成されたということではないということです。

その後、グループとして「村落開発に貢献するために何をおこなうのか」という問題に直面し、そこでグループとして明確な目標を持ち、具体的な計画を立てる必要に迫られます。しかし村落開発の目標、またそれを達成するための計画とは、問題を抱えている村落民、それを持続的にサポートしていける地元組織、援助国である日本の三者によって最初に話し合われ討議すること無しに得られるものではありません。つまり、日本人だけが集まっていくら議論したところで、農民、配属先は勿論、日本人間においてさえ皆を本当に納得させるグループ目標、計画にたどり着くことは非常な困難だったのです。

事実、野菜隊員や村落隊員が中心となり、グループとして明確な活動目標を持ち具体的な計画を立てることの重要性を訴え、時にはプロジェクト案をまとめ実行に移そうとしましたが、どれも農民、配属先、日本側（隊員および JICA 事務所）の三者を納得させるような説得力、実現性に欠け大きな進展には至りませんでした。つまりグループという名前はついていても、グループとしての活動はほとんどおこなわれていなかったということです。

（ここでいう「グループとしての活動」とは、グループとしての目標、計画のもと隊員が有機的に連携して活動するという事です。トラクターの運営管理、車両の利用に伴うその運営管理、情報交換のためのファティック会議はグループとしておこなわれていました。）

<樋口の時代>

その後、グループ統括役として平成８年度２次隊村落開発普及員でファティックに配属された樋口隊員が、再びグループ活動を推進するべく活動します。グループ活動を行う事による彼のねらいは、

「各隊員が場当たり的で、持続性のない独りよがりの活動をして 2 年間の任期が終わって

しまうという隊員活動の現状、過去の隊員の活動経験が蓄積され活かされることがなく、各々が同じ失敗を繰り返して任期が終わってしまう現状を、グループ活動をおこなうことによって改善する。グループとしての目標を持ち、各郡の現場で活動する隊員がその目標に沿って各郡の地域性を考慮した計画を立て活動するシステムを作る事によって、隊員活動に一貫性をもたせる。また、異業種の隊員が集まっている利点もその中でより有効に活かしていく。」

ということでした。

しかし、各人によって異なる協力隊への参加動機、協力隊というものへの認識、その考え方の違いから、彼の考えるグループの方向へみんなの意思をまとめあげるという事は非常な困難でした。

またファティック協力隊として共通のグループ目標を掲げようとしても、前述した通り、グループ結成時において目標設定、計画設定のために必要な手順を踏んでいないため、これも非常な困難でした。

しかし、だからといって何もしなければ何も始まらない、ということでグループ活動にやる気のある隊員を協力者として中心にし、グループ活動にあまりやる気があるわけではないがこれといって強い反対意見をもっているわけでもないというどっちつかずの隊員を味方にして、「ファティックグループの隊員が有機的に連携しておこなう活動」の第一歩として「農業セミナー」と「活動資料ファイリング活動」を始めました。

農業セミナー自体の目的としては、

1、農民教育

「農民に正しい農業知識を与え、自ら考え判断できる農民を育てる。」

2、農民交流

「先進農家の農民がお互いに知り合う場を作る。また、あまり経験のない農民が先進農家農民と知り合う機会を作る。」

3、配属先との関係改善

「実質活動上においてややもすれば希薄な隊員と配属先の関係を、セミナーという隊員活動を配属先に見てもらう事、また通訳、セミナー資料作成などにおいて配属先の協力を得る事により、その関係を改善する第一歩とする。」

というものでした。

活動資料ファイリング活動の目的については、

「ファティックにおける隊員活動の経験、ノウハウを資料として蓄積し残す事により、活動をおこなう上での参考資料として役立てる。」

ということでした。

当初、農業セミナーは順調におこなわれます。ファイル活動もまめな人、そうでない人の個人差から資料量、内容に差はあるものの、これまたぼちぼち順調におこなわれます。

しかし彼の目的は、これらの活動が「ファティックグループ隊員が有機的に連携して活

動をおこなう第一歩」となり、その後そこからさらに深みのあるグループ活動についての話し合いがおこなわれ、当初彼が考えていたグループ活動をおこなう事のねらいが達成されることにありました。

その後、セミナーや資料ファイル活動を第一歩として彼の考えていたグループ活動が展開されていったかというと、答えはNOです。

セミナーを続ける事、資料ファイル活動を続ける事はグループの活動として継続していく事になりましたが、彼の意思が他の隊員に深く理解され共感され、彼なきあともその意思を達成すべくグループが継続され運営されるという方向には向かいませんでした。

<樋口帰国後の時代> (年 月～ 年 月)

樋口隊員帰国後、彼の意思が深く理解され、共感されないままに農業セミナーとファイル活動を続けていくことだけがグループの活動として残されました。

その後ファティックに「グループの一員」として配属された隊員達は混乱します。「グループとは、グループ活動とは何なのか？」「農業セミナーを行い、資料をためる事がグループ活動なのか？」「農業セミナーを行い、資料をためることがどれほど異業種隊員協力による総合的な農村開発と関係があるのか？」「実質上機能しうるグループの目標とはどのようなもので、それはどのようにして決めればよいのか？」などなど。

そもそも農業セミナーおよびファイル活動の実施は、樋口隊員が目指すグループ活動を展開するための手段（それも第一歩であって、その後さらに深みのあるグループ活動について話し合われ進展していくことが必要な段階の手段）であり、グループの目標などというものでは全くなかったのです。

そのあたりがほとんど理解されないまま「グループだから。グループの一員として配属されているから。」という理由で、「グループとしておこなうべし」と残された農業セミナーとファイル活動をその必要性や効果に対し疑問を感じながらも、なかば義務として行っているという状況に陥ります。

そんな中「農業セミナーは、グループとして便宜をこうむっている車両や事務所を確保するために、JICA 事務所へのアピールとして行っているが、その効果や必要性、また自分の活動への還元性を考えた場合はっきりいって重荷だ。」「名前ばかりで何を目指しているのかよくわからないグループなら必要性を感じない。」という声があがり始めます。

また、樋口隊員が目指していたグループ活動への理解がないまま、つまりグループとは何なのかがよくわからない状態でグループ活動として始めた農業実験圃場（位置付けとしては農業セミナーと同列だったと思われます）が当初の計画を大きく裏切って上手くいかなかったこともグループ活動否定心を大きく育てた要因の一つになりました。

<シニア隊員着任後の時代> (年 月～)

ファティックシニア隊員（自分の事です）が 1999 年１２月 １５日にファティック配属に

なりました。
シニア隊員の主な要請内容は、

- ファティックグループの現状を把握し、その解散、再編成の可能性も考慮に入れながらファティックの村落生活の向上、改善という目標に対し、グループが最も有効に機能する形態に到達すること。
- ファティック州内を調査し、根拠に基づく隊員要請を行うこと。

の二つでした。

シニア隊員としてファティックに配属され８ヶ月経過しました。隊員活動の現場を見、話を聞き、配属先と話し合い、報告書を読み、自分の考えについて様々の人の意見を聞かせてもらい、その結果たどり着いたファティックグループに対する自分の考えを先ず述べます。

樋口隊員がグループ活動を行うことで達成しようとしていた目的、つまり
「隊員活動に一貫性をもたせ、各隊員が場当たり的で、持続性のない独りよがりの活動をして 2 年間の任期が終わってしまうという隊員活動の現状、過去の隊員の活動経験が蓄積され活かされることがなく、各々が同じ失敗を繰り返して任期が終わってしまう現状を改善する。異業種の隊員が集まっている利点をより有効に活かして行く。」
ということに関しては私もいいことだ思います。そのような方向に向かうことが、村人の利益を考えた場合望ましいのであろうなとうなずけます。

しかし現在のファティックグループにおいて、樋口隊員が思い描いていたようなグループ活動が展開される事によって上記の目標が達成される可能性について考えるに、その実現性において非常な難しさを感じています。

私がそのように考える理由は、樋口隊員自身もグループ活動を展開していくにあたって直面した問題でもある、

- 各人によって異なる協力隊への参加動機および協力隊というものへの認識、各人の考え方の違いが協力隊の性質上当然存在する現実の中、グループの方向へみんなの意思をまとめあげるという難しさ。
- グループ結成時において目標設定、計画設定のために必要な手順を踏んでいないため、グループとしての目標設定、計画設定が出来ないという難しさ。

という以上２つの問題は、ファティックグループの結成された経緯および協力隊の性質を考えるに如何ともクリアし難い問題であると考えるからであります。

協力隊の性質を考えるに、その活動が村落生活の向上、改善に向かっていれば各人の考え方、やり方が尊重されるものであって構わないと考えます。つまりグループの方針やグループの目標達成のために建てられた計画に同意共感できない隊員に「きみはグループの一員として派遣されており、この目標、計画はグループの決定なのだから嫌でも従え。」と強要することは出来ないということです。

また、そのように強要してでもそうするべきだというほど皆に対して説得力のある目標

や計画をたてることは、現段階では不可能だということです。

以上の理由から「隊員活動に一貫性を持たせ且つ異業種隊員の集まっている利点をより有効に活かす」ための手段として「グループをプロジェクトの様にしてチームとして機能させる」という方針は採らないことにしました。プロジェクトの様にとは「明確な目標を立て、その目標達成のための具体的な計画を立て、その計画に沿って目標達成する事を第一の目的としチームとして活動を行う。」という事です。

というわけで、ファティックグループをチームのようにしていくための第一歩であった農業セミナーを、それ自体が本来の役割を見失っていたこともあり継続していかない事にしました。また、実験圃場もほぼ同じ理由で継続していかない事にしました。

＜今後のグループの姿＞

以前、ダカール事務所の意見として「グループとしての予算が与えられている以上、グループとしての活動を行い、グループとしての結果を残すべきだ。」といわれていた時期がありました。そのためグループとして活動する事（農業セミナーを日本人グループとして続けていく事、異業種間協力のもとに共通の目標、計画を立て総合的な農村開発を行う事等）に対しその実現性や効果、必要性において疑問を抱いていても、「グループとして派遣されている以上その要望に応えるべく活動しなくてはいけないのではないか。」という意識が隊員間にありました。

しかし現ダカール事務所のグループに対する見解は「現在ファティックグループに与えられている車両、事務所などの特典はグループだから与えられているのではなく、いうなればたまたま与えられているのである。よってグループとして活動し、グループとしての結果を残さなければそれらを取り上げるというものではない。車両、事務所が隊員活動に活かされているのであればそれは今後も今まで通り活かしてもらい、グループとしてのあり方やその活動は、ファティック村落の生活向上、改善という目標に対し一番有効であると思われる形で行っていってくれればよい。」というものに変わりました。

それを受けて今後もファティックグループとして継続していく事は、

- 車両、事務所の利用に伴うその運営管理。
- 車両プログラムや事務所運営当番の決定、また情報交換の場として役立つファティック会議の実施。
- 自らの活動整理、および他隊員、後任隊員への資料として役立つ資料ファイル活動。

の三つにしました。

あとは各人が配属先の一員として、自分の技術、考え方を駆使してファティック村落生活の向上、改善という目標に向かい活動してください。

また今後の動きとして、上記した三つの特典および活動をファティック県の隊員のみにとどまらず、フンジュン県ゴサス県の隊員にも参加してもらう事を考えています。

その理由としては、以前はファティック州ファティック県の隊員だけがファティックグ

ループのメンバーと見なされていて、そのメンバーをもってトラクターの管理、農業セミナーの実施、実験圃場の運営などのグループ活動を行ってきましたが、今後従来行ってきたようなグループとしての活動は行わない方針に決まったこと、またグループをプロジェクトチームのような形で機能させるという方向には向かわないと決まった今、ファティック県という枠にこだわる理由はなくなったと考えるからです。

車両利用についてはニョジョール、トゥバクータ、ワジュールは距離的な問題から定期的な利用は困難かもしれませんが、フンジュンは十分可能であると思いますし、会議の場における情報交換はより多くの隊員の活動や意見を聞けるほうがより有益であると考えます。資料ファイルも然りです。また事務所の利用についても、より多くの隊員がその恩恵に与ってよいと考えます。

<ファティックシニア隊員の役割>

しかし上記したような活動だけでは樋口隊員が問題視していた状況、つまり「各隊員が場当たり的で、持続性のない独りよがりの活動をして 2 年間の任期が終わってしまう。過去の隊員の活動経験が蓄積され活かされることがなく、各々が同じ失敗を繰り返して任期が終わってしまう。」という状況を改善するのは難しいだろうと考えます。

そこで今後私が推進していこうとしている事は、配属先との連携強化です。配属先としっかり連携する事の利点は、彼らが

- 現地事情に詳しいこと
- 現地の技術を身につけていること
- 現地語を話せること

などが挙げられますが、どれも初めてアフリカで活動する日本人が手探りで活動するだけでは、容易にクリアできない問題であると感じます。

しかし一口に配属先といってもピンからキリまであります。配属先自ら率先して隊員を地域開発活動に巻き込み、ともに活動し、サポートしてくれるような配属先。普段はそれほど隊員に関心がないが、隊員の方から相談し働きかければ協力してくれる配属先。普段も隊員に興味なく、相談し協力を図ろうとしても非協力的な配属先。様々です。

しかし上記した配属先の利点を活かすためにも、また日本の援助として配属先に配属されている責任という面においても、配属先とお互いの活動に理解協力し合える関係を作る事は大切であると考えます。

今後私が目指す配属先と隊員の関係は、「隊員は配属先の一員であるということを配属先、隊員ともに認識し、隊員が農村開発センター（CERP）のチーム中で実質的に機能すること」です。つまり隊員の皆さんには配属先の中できちんと人間関係を築いてもらい、その中で配属先の上司、技官と話し合いながら活動を行ってもらうということです。好き勝手にやりたい事を、やりたい様に、やりたい所で、やりたい時にやるというのはダメということです。勿論自分の考え、自分のやり方を主張する事は大切で、自分の信念に沿っ

て、自分が正しいと信じる事を進めていってくれて大いに結構なのですが、それもただ自分勝手に行うのではなくて配属先の一員と行っていって欲しいということです。

勿論配属先のほうにも、自らのイニシアティブのもと隊員を村落開発活動に巻き込み、隊員活動をサポートし協力していってもらいます。自分達の給料さえもらえれば村落生活改善向上にも興味ないし、隊員活動にも興味なく無感心放任主義というのはダメということです。

しかしどうしても配属先の考え方、やり方と自分の考え方、やり方がかみ合わないという場合にはまた相談してください。どうにもこうにもいけてない配属先は世の中に確実に存在します。皆で話し合って一番良い解決策を考えましょう。

またもっと基本的なところ、例えば上司や同僚が金を貸してくれ、物をくれとやたらしつこいとか、女性差別主義者で我慢ならんとか、上司の奥さんが作った服をやたら買えと勧めてきて断ると機嫌が悪くなるとか、セクハラするとか、そういった問題もいつでも相談してください。

隊員と配属先の理解協力関係を深める具体的な試みとしては、各郡の配属先における毎月の定例会議の実施を推進しています。その中でお互いの今月の活動、来月の計画、直面している問題また各種意見、要望などよく話し合い意見情報交換を行ってもらいます。必要に応じて私と州所長も会議に参加し、双方の理解協力関係推進に努めます。

隊員の皆さんも配属先の上司、同僚と友好関係、信頼関係を築くべく努力してください。人間関係はいつの時代も大切ですから。

その他、シニア隊員の役割としては

□ 隊員活動の把握と後方支援

隊員の活動現場に実際に足を運び、活動を把握する事。またこんな情報が欲しい、あんな事について知りたいなどということがあったらいつでも言ってください。お答えできる事にはお答えしますし、お答えできない場合にはお答えできそうな人を紹介する、もしくはそれにまつわる文献を紹介するなどの手段で出来る限り対応します。その他の事でもとりあえず相談してみてください。

□ 新隊員活動立ち上げ手伝い

新隊員の方は、大概の人がアフリカで村落生活向上改善活動をするのは初めてだと思います。訳のわからん事ばかりだと思います。どこで、誰と、いつ、何を、どうやってやれば良いのか。隊員の皆さんの考え、配属先の意向、前任者の活動などを考慮しつつ一緒に考えましょう。また、「シニアに相談しても何も解決せん。私は自分の信念にもとづいて活動する。」もしくは「私は自分ひとりで考え実行するという過程を大切にしたいので、自分が正しいと思うやり方で活動します。」という人もいると思います。私としてはそういう考えはどちらかというと自主性に溢れいい事だと思います。願わくば配属先との関係は大切にして欲しいと祈るばかりです。

□ ファイル資料活動の推進

現在行われている月例活動レポート、建築物ファイル、活動村ファイルなど今後もきちんと継続してゆくということです。また資料ファイル活動の一環として、よりファティック協力隊として役立つ情報を集めるという主旨のもと「稲作マニュアルを作ろう、サツマイモ、タマネギマニュアルを作ろう」などと言い出すかもしれませんが、これは趣旨に賛同してくれる人とぼちぼちやります。

□ 隊員要請立ち上げ

前述したファティックシニア隊員要請内容というところに「ファティック州内を調査し、根拠に基づく隊員要請を行うこと」というのがあったと思いますがそれの事です。これについては先にあげたシニアの役割を行うことによって有用な情報が多く集められ、且つ何が必要な情報なのかわかってくると考えています。あらためて調査が必要な事は後日調査します。

以上「ファティックグループの歴史と今後のグループの方向」でした。出来るだけ簡単に説明するなどといいながらこんなにも長くなってしまった事をお詫びします。

また紙面の都合上「単独機材供与によって導入されたトラクターやトラックなどの機材」については今後ファティック JOCV の活動に関係してくる事は無いとの判断のもとほとんど述べませんでしたが、詳しく知りたい人がいたらいつでも尋ねてください。

□ ファティック会議

グループ隊員が集まって月に一度会議を行っていますが、それがファティック会議です。ファティック会議は通常、月の最終土曜日に行っています。開始時間は朝９時半です。

会議の定期的な議題は

□ その月の活動報告と来月の予定

□ 来月の「車両プログラム」、「ボンヌ当番」の決定

でした。

そしてその他の議題があるときには、それについて話し合う、それがファティック会議でした。その他の議題とは今までは主に、「トラクター、脱穀機の運営」、「ファティックグループの今後（グループをプロジェクトにするべきか否かとか、グループ活動とは何なのかとか）」、「農業セミナーについて」、「ファティックシニアについて（誰を呼ぼうとか何してもらおうとか）」「農業実験圃場について」などという事について話し合われた事が多かったようです。というか多かったです。

しかし今後、グループの名のもとに日本人が集まって何かをチームのような形で強制的におこなうことはしないという方針に決まった今、あまりそういった議題は頻繁にはあがらないと思われます。（勿論、気の合う者同士、志の合う者同士、日本人間で協力して活動したい、異業種隊員が集まっている利点を生かしたいという人は大いにやってください。

いいことです。そのような活動の提案の場に利用してもらって全然 OK です。私が言っているのは、グループとしてそれを強制するような事はしないという事です。)

そこで、今後ファティック会議を行う事の意義として私が重点をおきたいのは、□ の活動報告です。活動報告の主旨は「会議の場を、様々な職種、様々な任地の隊員の活動や考えを知ることが出来き、また様々な任地の様々な職種の隊員から自分の活動や考えに対する意見、アドバイスを聞く事が出来る情報交換の場としての役立てる」ということです。

しかし、現在のファティック会議における活動報告に対し、皆がそのような意図、認識のもと積極的に参加しているかというとかなり疑問符がつくと言っても差し障りない状態だと感じています。ファティック会議への参加もグループの一員として派遣されてしまった故の義務だ、重荷だと感じて参加しているといったところが現実をより正確に表しているように感じています。

そんなファティック会議を、活動報告を前述した活動報告の主旨に従って、今後より有意義な実のあるものにしたいというのが私の願いです。

やり方も今までのように先月の活動をつらづらと述べて、はいおしまいと言うようなものでなくもっと皆が興味をもって聞けるようなやり方にしていこうと考えています。

今考えているのは、新隊員加入時における先輩隊員の活動発表です。配属から今までどのような経緯でどのような事をしてきたのか、どのような事がうまくいってどのような事がうまくいかなかったのか、今何が問題になっているのか、どのような事に悩み、どのような事に難しさを感じているのかなどなど、仕事、生活すべてにおいて正直なところを包み隠さず本音でガッツと語ってもらい新隊員の方に参考にしてもらうのが目的です。

また、ひとつ活動を終えたことがあったらそれについて発表会をするという案もあります。「小さなハートプロジェクトを使った学校トイレ建設について」とか「稲作1シーズン開始から結末まで」とか「成功する学校植林とは」とか「水道水を使った農園活動」とか「農家に足繁く通いお茶を飲んで世間話をして帰ってくることの重要性と効果」とか「改良かまどについて」とか「防風林植樹について」とか。

せっかく色々なことの経験者がいるのに、通り一遍の月例報告だけでは（しかも新しい隊員には先月の事だけ聞かされても何の事だかわからない）そのノウハウが皆のところまで伝わらない、勿体無いということです。資料を読めばいいと言う意見もありますが、そういう活動がおこなわれていることにきちんとした認識が無ければその資料を探す事すらままならないでしょう。

しかしそういった試みも全ては皆さんの積極参加の姿勢次第です。ファティック会議を有益な情報収集、情報交換の場として活かすという目的を、自分自身がどれだけ果たす事が出来るか、その達成のためにどのような姿勢で臨むのか、そこに全てがかかっていると私はそのように思っております。一期一会なのです。

しょうもない質問なんじゃないか、しょうもない発言なんじゃないか、しょうもない提案なんじゃないか、自分が質問する事で皆の貴重な時間を無駄にする事になるんじゃないか、などとためらう事は無用です。わからんことはどしどし聞いて、言いたいことはどしどし言いましょう。その結果口論になってもいいのです。誰かが泣いちゃったりしてもいいのです。いや、泣いちゃったりするのはあまり良くありませんが、それでも言いたいことも言わず、釈然としない気持ちのまま釈然としない時間が流れていくという事態よりはずっといいと、そういうことです。

また活動に関する事以外でも、皆に提案したい事、皆で話し合いたい事、協力してやりたい事などがあればどしどしその提案の場に使ってください。文化交流日本祭りをしたいとか、運動会をしたいとか、有志を募って他任地訪問ツアーに出たいとか何でもOKです。事前に言っていただければ会議の議題として取り上げます。

皆で熱いファティック会議にしましょう。緊張感の中にも笑いあり、涙あり、愛あり、そんなファティック会議になることを願って止みません。

□ ファティック事務所について

ファティック市の政府提供住宅をJICAダカール事務所の許可を得てファティックグループの事務所にしています。事務所には、車両のほかにコピー、電話、FAX、プロジェクター、パソコン等の電気機器や様々な工具類・備品がありグループ隊員はそれを利用する事が出来ます。備品を借りていく時は「備品ノート」に記入しなければなりません。

今まではファティック会議の時にグループの会計係が月一人1万CFAを生活会計として徴収し、そこから事務所の光熱費、水道代、電話代、消耗品（コーヒー、マッチ、トイレットペーパー等）を支払うというシステムで事務所運営をしてきました。

しかし今後、今までのファティック県という枠にとらわれず、フンジュン県、ゴサス県も含めた隊員による事務所利用を考えているので、もしそうなった場合運営方法の変更が必要になってくると思われます。

例えば今までは誰がどれくらい利用したとしても一律に集められた生活会計の中から電話代を支払ってきましたが、今後距離的問題から隊員によって事務所電話使用頻度に大きな差が出てくるものと思われます。その際の不公平をなくすために、電話にメーターをつけて自分が使った分は自分できっちり払うようにするとか、また消耗品は事務所宿泊者がより多く消費しているということなのであれば、事務所宿泊は有料にするとか。そして、一人あたりの生活会計徴収額を今より低くするとか、そういったことです。

ファティック県、フンジュン県、ゴサス県の隊員皆に意見を聞き、出来るだけ早急に決めていきたいと考えています。

現在の事務所管理システムについて更に述べます。

毎月のファティック会議の際にボンヌ当番を決め、毎月曜、木曜の午前中事務所で待機

してもらっています。ファティック事務所には、毎月曜、木曜の午前中にボンヌがやって来ます。アミという名前です。そして事務所の掃除とシーツの洗濯をしてくれます。その時ボンヌがちゃんと来たかどうかを確かめ、その掃除ぶりをチェックし（適当な掃除をしていたらガッツと注意してやってください）、必要に応じて掃除を手伝う（例えばボンヌが勝手に触ってよいか判断しかねるものが散らかっていた場合それをかたづけるとか）ことが主な任務です。

その月の最後のボンヌ当番の人が生活会計の中からボンヌの給料を支払います。日給（1000CFA）×回数（月に何回来たか）で計算します。ボンヌ当番は必ずホワイトボード（伝言版ではなく車両予定表のほう）の日付のわかるところにボンヌがその日来たか、来なかったかを記入してください。

事務所の安全管理については、ガルディアンと玄関にダイアル式鍵をかけています。事務所に誰もいないときは必ず鍵をかけておきます。また、ダイアルは鍵を開けた後、合わせたままにしておかず、必ずダイアルの数字を回してください。外部の人にダイアルの番号を知られないためです。

最後に、事務所は誰の住居でもありません。公共の場です。にもかかわらず、私物を置きっぱなしにしたり、使った工具をもとの場所に戻さなかったり、汚した食器を洗わなかったりという人が時に見受けられますが（実は私もたまにあります）そういうことはしないように心掛けましょう。

□、ファイル活動について

活動に関する資料をファイルして蓄積させ、後任隊員および他隊員への資料として役立たせるのがその目的です。また、月例活動資料などきちんと書き溜める事によって自分の活動の整理としても役立ちます。先月または先々月何をしていたか、何を考えていたか、結構思い出せないものです。活動日誌をつけるのもいいですが、月ごとに整理してあると後から見やすいものです。

現在ファイルフォーマットとしてあるのは、月例活動、建築物ファイル、村ファイル、農業ファイル、村人ファイル、お店ファイルなどなどあれこれたくさんあります。

それらを書き溜め、自分のファイルなり、ファティックセンターファイルなりに綴じてゆくわけです。

しかし現在少々ファイルの綴じ方、必要なフォーマット不必要なフォーマットの区別なども含めてファイルの整理が行き届いていない部分があるようです。

近日中にファイル係と相談して今後のより改善されたファイル活動の姿について決めていきたいと考えています。しばらくお待ちを。

□、現在の役割分担

現在のファティックグループの役割分担とその大まかな任務について。

総括：近藤　直

グループの責任者です。

会計：友松　亜紀（川村　真紀に引き継がれます）

グループの支援経費の申請、管理。

生活会計：織田　伊万里

生活会計を集めます。

車両管理：島田　豊和

車両の管理です。

事務所管理：荒木　アレフ

事務所の管理です。

ファイル委員：岡崎　克江、荒木　アレフ

ファイルの事色々考えたり、管理したりします。

□、車両の利用について

1、はじめに

ファティックグループで現在使用している車両、三菱 L200 は資材運搬、複数人数による巡回などの用途で隊員活動に役立てられています。

前述の通り、今まではファティック県の隊員（プラス、ガンジャイ隊員）のみがグループのメンバーとみなされ、そのメンバーのみが車両利用の恩恵にあずかるという形で車両利用がなされてきました。しかし今後ファティック県という枠にこだわらず、フンジュン県、ゴサス県も含めたファティック州全体での車両利用を考えています。

とは言うものの、ニョジョール、トゥバクータ、ワジュールは、距離的な問題から定期的な車両の利用は難しいものと思われます。しかし、どうしても必要な時はかの地での利用も今後可能性としてその都度検討してゆきたいと考えています。

しかし、あまりにも頻繁な長距離移動は運転手の疲労を考えた場合、望ましい事ではないので、出張扱いになる長距離移動は週 2 日以下に制限するとか運転手の意見も踏まえながら、やり方を考えていかないといけないでしょう。出張の定義については後述します。

参考までに車両利用の例をいくつか挙げますと、ワクチン巡回、植樹用苗木運搬（フィムラ苗畑から運ばれることが多い）、トイレ、井戸等建築物建設資材の運搬、カウンターパート、配属先上司との巡回、各種セミナー（農業、栄養、衛生など）開催に伴う資材の

運搬および人の移動などです。
ちなみに車両の荷台部分に人を乗せるのは禁止ですので注意してください。

2、車輌プログラムの入れ方
毎月末のファティック会議の時に、翌月の車輌プログラムを調整します。ファティック会議までに、翌月の何日に車輌を使いたいか大体でもいいから決めておいてください。車輌を使いたい日が他の人と重なったら、重要度に基づき調整します。

3、車輌の利用方法
- 指定時間前に運転手のアマドゥ・リー氏（tel.949 - 10 - 76）が事務所にやってくるので、それまでに事務所に来て、彼に車のキーを渡します。そして運転手週労働時間記入表に出発時間を記入します。出発前に運転手と車輌の簡単な点検をしてから Tournée に出発してください。
- Tournée から帰ってきたら、助手席の前のボックスに入っている「車輌運行ノート」に、「出発時刻」、「目的地」、「帰還時刻」、「総走行距離」、「軽油量（gas-oil）」（その日ガソリンスタンドで軽油を入れた場合のみ）、「利用者のサイン」を記入します。そして運転手週労働時間記入表に終了時間を記入し運転手のサインをもらいます。
- 軽油（gas-oil）は原則満タン返しです。軽油チケットを使ってください。別紙の「軽油チケットの使い方」を参照してください。
- 運転手に「出張費」３，０００CFA の支払いが必要な場合は、 Tournée から帰ってきた時に支払い、助手席の前のボックスに入っている「領収書帳（carnet de reçus）」に必要事項を書込み、運転手にサインをしてもらいます。領収書は裏に「日付」、「自分の名前」を鉛筆で記入し、グループの会計係の郵便入れに入れてください。出張に伴う「宿泊費」７６００CFA においても同様です。
  「出張費」は四半期末の支援経費の精算後に返ってきますが、それまでは、利用者の立替えとなります。

4、車輌利用における注意事項
- 車輌出しは原則としてその日の利用者が行うこと。やむを得ない場合は、ファティック市在住者かその朝事務所にいる隊員に依頼してください。
- 車輌の引き取り依頼もやむを得ない場合のみ、ファティック市在住者かその日事務所にいる隊員に依頼してください。車輌の引き取りを依頼された人は「車輌運行ノート」に「帰還時刻」、「総走行距離」のみを記入します。依頼した人はその他の項目を全て（サインも）事前に記入しておくこと！ □、□ のことは、運転手が１人で運転している時に事故などのトラブルに巻き込まれた場合に困るからです。
- 「車輌運行ノート」「運転手週労働時間記入表」の記入、出張費の領収書の裏面への

「日付」、「名前」の記入は漏れがないように！ これが抜けていると、支援経費の精算時に担当者が誰がどれだけ立替えているのかわからなくなり、確認にとても苦労します。

- 出張で連日車輌を使用する場合も「車輌運行ノート」は毎日記入してください。
- 運転手に休日出勤を依頼する時は必ずシニア隊員を通してください。

4、出張の定義と支払方法

出張の定義は、 ファティック市から片道５０ｋｍを超える移動をおこなう場合と、 宿泊を伴う移動の場合です。

出張手当は日当３０００CFA，宿泊代７６００CFA です。

一泊二日で出張した場合には、初日の手当てが３０００CFA，宿泊費が７６００CFA，翌日の手当てが３０００CFA，合計１３６００CFA の出張費を支払うことになります。

運転手が隊員宅に泊まった場合においても、宿泊費は支払われます。

片道５０ｋｍを超える移動とは、

フィムラ方面ではジョフィオール以降

ダカール方面ではルーリ以降（チャヂャイの先のサンジャラの先）

フンジュン方面ではジロールの町以降

カオラック方面ではクタル、カホン以降

バンベイ経由ティエス方面では、ダンガルマ以降

バンベイ経由ジュルベルは出張、ジャハオ経由ジュルベルは出張と見なさず

ワジュルは出張、ゴサスはカオラック経由でいった場合は出張、ファティックから直接行った場合は出張と見なさず

と決められています。上記の決めから判断して出張と見なされる移動をした場合はたとえ日帰りでも出張日当３０００CFA を運転手に支払ってください。不明な点はいつでも質問してください。上記の決めでは対応できないところに移動する事になった場合また相談してください。

- 休日出勤

土日、祝日（la fête nationale）は運転手も休日です。運転手が休日出勤した場合には振替休日をとる事で対応します。休日に車輌を利用したい場合は、前月のファティック会議で申請してください。急に車輌を休日利用しなければならない事情が発生した場合は、運転手に直接ではなく、シニア隊員を通してください。シニア隊員から運転手に事情を説明し、そこで運転手の合意が得られれば利用可能です。

それから、運転手の勤務中の食費は、基本的に給料や諸手当に含まれています。しか

し、普通、隊員はセネ料理などの昼食やコカなどをおごっているようです。おごる、おごらないは自分の判断でしてください。

□ トラブルが発生したら…

1．車輌の故障

故障の際はどんな場合でも必ず車輌管理責任者（現在は島田隊員）に報告してください。

□ 軽微な故障の場合 ⇒ 軽微な故障とは、車輌利用は継続してできる程度の故障のことです。例えば、Tournée の途中でパンクして、どこかの garage でパンク修理をしてもらった場合などです。このような場合、必ず領収書をもらってきて、帰ってきたら修理の領収書を島田隊員に渡し、故障内容を報告します。島田隊員が捉まらないときは事務所のホワイトボードに伝言を残してください。立替えた修理費などは四半期末の支援経費の精算時にかえってきます。金額が大きいときはグループの caisse で立替えますから、島田隊員かシニア隊員に相談してください。

□ 重大な故障の場合 ⇒ 車輌が使えないか、それに近い状態のときです。この場合、すぐ島田隊員とシニア隊員に連絡してください。２人とも捉まらないときは、ＪＩＣＡ事務所の調整員に報告してください。それから、次の日の車輌利用予定者に故障のため多分翌日車輌が使えないことを連絡してあげてください。

2．それ以外のトラブルに巻き込まれたら…

□ 軽いトラブルの場合 ⇒ 例えば、運転手のアマドゥさんと出張手当の金額でもめたとかという程度の場合です。シニア隊員に相談しましょう。

□ 重大なトラブルの場合 ⇒ 具体的には、交通事故などのことです。この場合は、Ａ．警察（police）または憲兵隊（gendarmerie）、Ｂ．ファティック事務所（シニア隊員）、Ｃ．ＪＩＣＡ事務所、の３ヶ所にすぐに報告してください。小さな事故でも決して運転手と勝手に対処しないように！

12246